オンラインシンポジウム
～図書館でつながる新たな可能性～

開催結果概要

日時：令和３年（2021 年）
1月 15 日(金)18:30～
方法：オンライン(66 名視聴)

プログラム：主催者挨拶、進行説明（18:30～18:35）
第一部 講演「これからの図書館の可能性について」（18:35～19:05）
第二部 報告「(仮称)中央図書館基本構想素案について」（19:05～19:20）
第三部 パネルディスカッション 「これからの豊中市立図書館に期待すること」（19:20～20:15）
事前質問への回答、閉会（20:15～20:30）

主催者挨拶／豊中市教育長 岩元 義継

豊中市立図書館には、昭和 20 年（1945 年）の開館以来市民の皆さまとともに歩んできた 75 年の歴史があり、子ども読書活動や市民協働関連の取組みがその特徴であると考えています。

本市では、これまでも時代に対応した図書館事業を充実・展開してきましたが、情報化・デジタル化のスピードは大変速く、特に昨年からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大によってさらに加速していると感じています。また、本市は公共施設の老朽化の問題にも直面しています。現状の施設数・規模を維持した場合の将来的な維持管理コストには、財政的に耐えられないと見込んでいます。一方、市立図書館の利用登録率や貸出冊数は残念ながら減少傾向にあり、特に 40 歳代以下の若い世代ではその傾向が顕著に見られます。

こうした様々な状況を踏まえ、これからの図書館サービスのあり方や中長期的な方向性を示すため、現在「（仮称）中央図書館基本構想」の策定を進めています。本日は経験豊富で専門的知見もお持ちの皆さまに参加いただき、これからの市立図書館に期待することについて議論を深めることができればと考えています。

※ 第一部、第三部において登壇者各位には様々な視点からお話しいただきましたが、開催結果概要作成にあたっては、特に重要と思われる内容を中心にまとめさせていただきました。

第一部 講演「これからの図書館の可能性について」

講演者： 嶋田 学氏
（奈良大学文学部教授）

豊中市をはじめ各自治体の図書館勤務を経て、平成 23 年（2011年）から岡山県瀬戸内市の新図書館開設準備業務に携わる。平成 28 年（2016 年）から瀬戸内市民図書館館長。平成31年（2019年）から現職。専門は図書館情報学、公共政策論。

「これからの図書館」を取り巻く環境

- これからの図書館を取り巻く環境として様々なことが考えられるが、今日は3つ柱を立ててお話しする。1つ目に市民協働の主役となり得る高齢者との関係について、2つ目に AI との関係について、3つ目に内閣府が提唱する Society 5.0 との関係について触れていく。

① 高齢者という市民との関係

- 高齢化はネガティブに捉えられることが多いが、利用者としての高齢者とどう関わるかが大変重要になるのではないか。
- 図書館で 32 年間働いていた中でも、市民やボランティアから「高齢化が問題だ」とよく聞いたが、本当に問題なのだろうか。
- 高齢者が増えれば、可処分時間を持つ市民が増えることにもなる。また、これからは健康寿命を意識した、あるいは高等教育を受けた高齢者の割合が高まり、質も量も変わっていく。これを市民協働のチャンスと考え、高齢者の知恵や経験を図書館という場での学びや気付き、まちづくりに積極的に活かすことが重要である。

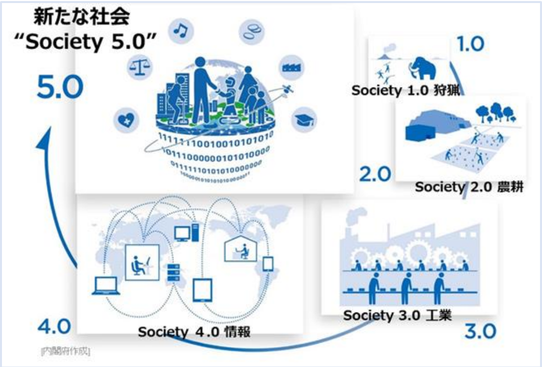
- いわゆる2025年問題に対しても、皆で支え合う生きやすいコミュニティづくり、地域づくりに図書館という場が貢献できると思う。

② AI という知恵との関わり方

- 私たちの行動や意思決定を支援してくれるものの、現在の技術では「なぜ」かが示せない点がAIの限界と言われており、そこに人間の活動領域がある。AIにできることはしてもらい、私たちは人間らしさを高める観点でうまく付き合うことが重要である。具体的には、これまで十分に向き合ってこなかった「なぜ生きるのか」「幸福とは何か」といった問いに取り組むことなどが考えられる。図書館は、先人の知恵の集積体としてそれを支えることができるだろう。
- 人間の価値観・人生観の背景には私たちが生まれ、育ち、コミュニケーションする中で生まれる様々な物語があり、最近では「ナラティブ（物語）」とも言われるが、そこに社会的動物としての人間が生きる意味も宿っている。
- 私たちが他者や社会との関係性の中でより豊かに自分の物語をつくるとき、図書館が知識・情報や現実・仮想空間での「対話」の場を提供することで、興味・関心を通じた人と人との間のつながりを支えることが重要になるのではないか。図書館は、知と情の両面で人間の精神活動を支えることにより、AI ではできない人間らしさを基調とした社会づくりにその存在感を発揮していけるだろう。

③ Society 5.0 と期待されるもの

- 情報社会に続く新たな社会として、仮想空間と現実空間の高度な融合により、経済発展と社会的課題の解決を両立し、人間中心の社会をつくろうとする構想が Society 5.0 である。



出典）内閣府 HP　https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html

- 内閣府が示すイメージをよく見ると、解決されるのは外的要因が多く、目指される一人ひとりが活かされる社会とはどのようなものか、必ずしも描かれてはいない。逆に言えば、Society 5.0がどのような社会をつくるのかは、私たち一人ひとりにかかってくる。

「これからの図書館」の創造と経営

- これまで豊中市も大事にしてきた直営方式の優位性として掲げられていたのは、司書の継続的な雇用によって知識や経験を蓄積し、専門性の維持・向上を図ることだった。
- 現在、自治体の司書のうち正規職員は3割を切ろうとしており、指定管理者制度によって様々な主体が図書館の経営を担う状況も生まれている。
- 民間による経営では市民協働や行政連携がスムーズに進まないと見られていたが、自治体が事業者としっかり連携協働している事例もあり、必ずしもそうではない。
- 重要な点は、直営方式か指定管理方式かに関わらず、自治体として図書館政策を十分に展開できているかである。市民の暮らしや仕事に役立つ資料・情報の選定や提供方法を検討し、実現できているか、時代状況に即して臨機応変に改善できているか、市民を自治の担い手と捉えパートナーシップを持って接しているかなどがこれからの図書館経営では重要である。
- 図書館の公共性のあり方を再構築することもこれからは重要になる。「公共」図書館の「みんなの」という趣旨が実現されているかを今一度考えたい。図書館は強いニーズに応えがちだが、それが多くの市民のニーズとは限らない。
- 経営学には関係性のマーケティングという考え方がある。本来あるべきニーズとは、あらかじめ存在するものではなく、自治体と市民とがコミュニケーションを通じて信頼性を構築し、立場を超えた関係を結ぶ中で共創的に生まれるものだとする考え方である。このように、これからの図書館には住民との積極的な関係づくりを通じたニーズの創出が求められるのではないか。

「これからの図書館」のために……

- ここまでの前提の下、これからの図書館のために何をすべきかを示したい。
- 1つ目に必要なのは、市民と一緒に「これからの図書館」を考える機会をつくることである。今の社会は非常に多様化・複雑化しており、公共の仕事を官だけではやり切れない。公共図書館が「教育と文化の発展に寄与する」という任務を司書や限られた人員のみで果たそうとするのには無理がある。市民協働は目的や課題ではなく、公共図書館を本来あるべき姿として維持・発展させていくために避けて通れないものである。
- 2つ目は、市民とともにつくりだし、共有すべき図書館の価値と意味を考えることである。図書館が提供するのは、資料や情報だけなのだろうか。市民がそれらに求めているのは気付きや学びといったものだろう。それによって得られる喜びや楽しみ、成長や充実感などを通して、究極的には幸福感を求めているのではないか。市民の幸福実現をもたらすことが図書館の役割であり、公共施設の価値である。そこにこそ、図書館員と市民が協働する意味がある。

コロナ禍の図書館サービスを考える

- 今のコロナ禍において図書館サービスはどうあるべきかを考えることも重要である。
- 1つ目に、非来館型サービスの早急な充実が必要である。自宅から利用できるオンラインデータベースの導入が求められるほか、地域資料のデジタルアーカイブ化も極めて重要になる。移動中に楽しめるオーディオブックも改めて見直されたが、さらに注目されたのが電子図書館である。まだコンテンツが少なく費用対効果の面でも導入が難しいかもしれないが、増えるのを待つのではなく、増やすための積極的な姿勢が図書館界にも望まれる。また、読み聞かせなどのウェブ配信は、市民と関わりながらどんどん増やしていくべきである。レファレンスサービスのウェブ対応もまだ十分ではなく、ウェブコンテンツ化が難しい資料の郵送についても充実の必要がある。
- 2つ目に、図書館サービスのリ・デザインがある。図書館関係有志で検討を始めており、貸出や資料・情報提供のあり方について問い直す必要があると思っている。公共図書館が提供する価値と意味を再考し、どのようなサービスがあるべきなのか、市民とも改めて議論しなければならない。つまり、貸出点数ではなく実利用者といった観点で、より多くの市民が図書館を利用できるようデザインする必要がある。その意味で、コレクションのあり方について抜本的な再考も求められる。また、市民一人ひとりの物語を支える資料・情報を提供することや、コミュニティへの参画及びコミュニティづくりへの支援、図書館自体がコミュニティとなることも今後重要になる。

おわりに……

- 人が人らしく生きることを図書館が支えるためには、人の物語を生成する知との出会いや、人が知を得るために必要な対話・思考を、物理的なあるいはバーチャルな場として促し、醸成していくことが重要である。図書館はこうした営みによって私たちのコミュニティづくりに貢献できる。
- 人々の対話をつくるために図書館がこれからできることについて、図書館員が自己完結的に考えるのではなく、住民との関係性や協働の中で、ともに考えつくっていくことがこれから求められる。

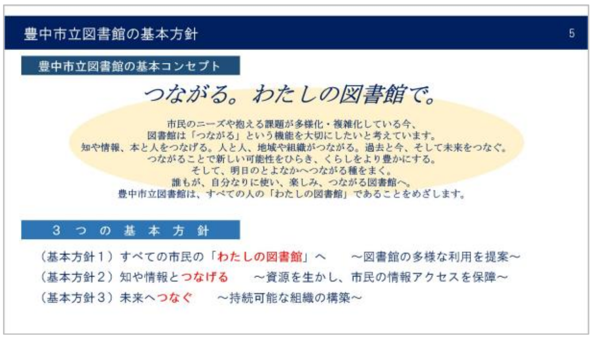
第二部 報告「(仮称)中央図書館基本構想素案について」

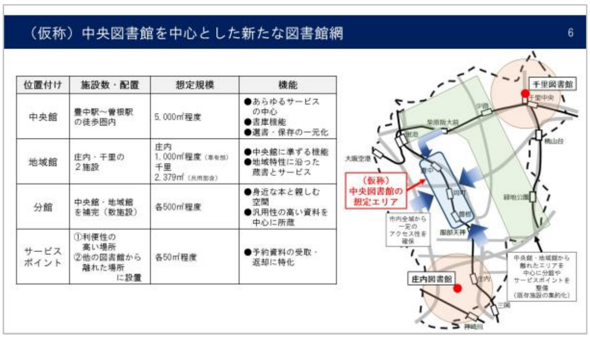
豊中市教育委員会事務局読書振興課からの説明(※一部要約)

現岡町図書館

- オンラインミーティングを含む様々な議論を経て、基本構想に掲げる基本コンセプトを「つながる。わたしの図書館で。」と設定した。「つながる」には知・情報へのアクセスに加え、人と人、地域や組織がつながること、図書館サービスを未来へつなぐことへの想いを込めた。
- 施設面では、老朽化した岡町図書館の更新を念頭に新たに(仮称)中央図書館を整備するとともに、それを中心としたサービス網を構築する。地域館や分館のほか、予約資料の貸出・返却に特化したサービスポイントも設置することで利便性を高める。全体としては、「豊中市公共施設等総合管理計画」の目標である施設総量を減らすことの中で、より良い公共サービスの実現を目指す。
- サービス面では、新たなニーズに対応しつつ、豊中市立図書館の強み・特長を活かしていく。デジタル化への対応や、アウトリーチ・非来館型サービス及び人と人をつなげる場としてのサービスの展開などを重視していく。
- 基本構想の策定はスタートラインと捉えている。今後は議論を本格化し、令和4年度(2022年度)に(仮称)中央図書館の候補地などを選定し、令和10年(2028年)頃の開館を目指す。その間は、評価指標に基づく進捗管理も行い、効率的・効果的運営を進めていく。

説明スライド(一部抜粋)

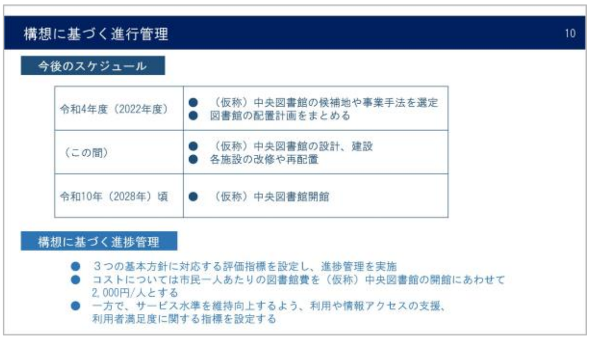




＜自宅から利用できる図書館サービス『e-レファレンス』＞

＜地域の施設での絵本の読み聞かせ(出前講座)＞　＜通所支援事業所への配本(えほん配達便)＞

＜おはなしボランティア　フォローアップ講座の様子＞　＜岐阜市立中央図書館『BookBook交歓会』の様子＞
(出典:同施設ホームページ)



第三部 パネルディスカッション「これからの豊中市立図書館に期待すること」

テーマ1 社会の変化と求められる市立図書館像について

天瀬氏

天瀬 恵子氏

豊中市立図書館協議会 委員
豊中図書館の未来を考える会

地域で子どもと本をつなぐ「子ども文庫」を主宰。本を介した親子の居場所づくりのほか、幼稚園や小学校でのおはなし会にも携わる。豊中子ども文庫連絡会や大阪府子ども文庫連絡会の役員を歴任。ブックスタート事業など、豊中市の子ども読書活動の推進に関わっている。平成27年(2015年)より豊中市立図書館協議会委員。

- 子ども文庫を主催しており、新しい図書館をつくる運動や学校図書館への司書配置を求める運動にも取り組んできた。ブックスタートで孤独と不安を抱える母親たちに会い、その居場所をつくりたい思いで15年ほど前に文庫を始めた。今はスマートフォンやSNSなどが普及したため、顔が見えない関係や情報の多さに不安を抱える母親が多い。社会は変化しても、顔が見える、手渡すという文庫として大事な面は変わらない。
- コロナ禍で社会は激変したが、図書館が様々な情報を得る場所であることは変わらない。今も10年後も、誰もが情報にアクセスできる場所であってほしいし、優秀な司書がいてほしい。

池澤氏

池澤 龍三氏

一般財団法人建築保全センター
第三研究部 次長

平成2年(1990年)千葉県佐倉市に採用、平成19年(2007年)よりファシリティマネジメント業務に従事、学校のプールを廃止し民間のスイミングスクールで授業を行うなど先進的な取組みを実施する。平成25年(2013年)より現職。講演や執筆・寄稿などを通じ、全国での公共施設マネジメントの取組み推進を支援している。

- 建築の視点から考えると、環境が変わることを念頭に置いた建物づくりが大切である。次の世代がもう一度使い勝手などを考える余地のある建物としてほしい。また、ライフサイクルコストの視点からメンテナンス性の高い機能的な建物とすることや、様々な官民連携の方法を考えていくことも大切だろう。
- コロナ禍をきっかけに考えたことだが、うまく屋外空間を利用できると伸びやかで地域への開放性を持った建物となるのではないか。

小池氏

小池 繁子氏

しょうない REK 代表

平成16年度(2004年度)、「協働事業市民提案制度」により、庄内図書館にて、リサイクル本販売で得た収益金を活かした地域活性化に取組む「しょうないREK」の事業を開始。このほか、多文化共生や地域での子どもの居場所づくりなど幅広く活動。市民活動や地域活性化をテーマとした講演会やセミナーへの登壇も多数。

- 15年以上前に「しょうないREK」を始めた頃の課題は、子どもの学力向上や安全確保、南部地区・図書館の活性化だったが、年月が経つにつれ生活困窮家庭や外国人家庭の増加などの問題が出てきた。夏休みの子どもの宿題サポートや、多言語の指差しカード・吹替版ビデオの作成などにより対応している。
- 私たちは、地域や市民に最も近い図書館に事務局があることが大きなポイントだと思っている。図書館が窓口となり、コミュニティと私たちをうまくつないでくれることで協働のきっかけとなる。

岩元教育長

岩元 義継

豊中市教育長

平成2年(1990年)豊中市に採用、人事課長や人材育成センター長、財務部長を経て、平成30年(2018年)6月より現職。直近では新型コロナウイルス感染症の拡大防止が求められる中で、ICTを活用した教育環境の充実などを進めている。

- 図書館活動を市民と進めてきたことは大きな特色で、今後も大切にする必要がある。施設老朽化や利用登録減少などの課題は、基本構想をしっかりと示し、克服しなければならない。
- 昨年8月に「とよなかデジタル・ガバメント宣言」を出したが、市立図書館の予約件数がこの10年間で約2割増加していることなどからも、インターネットの活用が進んでいることが伺える。

- 将来的に理想的な姿は、いつでも利用できるデジタル図書館と考えられ、時間はかかるだろうができることから進めていく必要がある。

とよなかデジタル・ガバメント戦略による取組み

天瀬氏

- 今後もつながりや人、対話することや人が手渡すことが大切である。それを求めて文庫に来る人もいる。デジタル化の利点は活かせば良いが、肝心なのは人で、なくしてはいけない。

小池氏

- 図書館は地域・市民に最も近く、知らない間にそのニーズを蓄積している。図書館経由で地域の課題を把握できることを大変心強く思う。

池澤氏

- これまでは箱物＝サービスと捉える傾向があったが、逆である。どのようなサービスを提供するかが最初で、次にそのための箱物をどう用意するか、となる。順番を間違えてはいけない。
- これからの箱物は公共だけでつくるものではないのかもしれない。地域と色々と連携し、令和の時代の新しいつくり方をしていくべきだと思う。

岩元教育長

- 紙の本やリアルの場、人や情報との出会いに対するニーズは継続してあり続けるだろう。一方でデジタル化への新しいニーズもあり、限られた財源の中で双方を公共サービスとして求めていく必要がある。基本構想で様々なアイデアを出しながら進めていくことになるため、皆さんからもアイデアをいただければありがたい。

テーマ 2 再編を通じて求められる市立図書館像を実現する方法について

小池氏

- それぞれが持ち味を活かして取り組むことでより高い効果を生み出すという協働の観点から言うと、まだ市民の巻き込み方が足りない。
- 地域のニーズや課題を細やかに拾い、行政職員や民間団体へつないでくれる人が増えれば、身近な問題により丁寧に取り組むことができる。

天瀬氏

- 「子ども読書活動推進計画」の 10 年間には、行政と市民が一緒につくった連絡協議会とワーキンググループがあった。連絡協議会に行政各部署や多様な市民活動団体が集まったことで、そこでできたネットワークが子どもの読書活動の推進に大きく貢献した。
- （仮称）中央図書館ができることで地域館のサービスが低下することを心配する声が多い。そうではなく、ネットワークの隅々で地域館や分館が地域のニーズを吸い上げ、それを統括して全市的な視点から判断し、地域館をサポートする（仮称）中央図書館になってほしい。

池澤氏

- 図書館の機能に貸出やレファレンスとコミュニティ形成の大きく2つがあるとすると、各館についての考え方は建築的にも同じだろう。
- 前者については、各家庭に資料を届けるための物流センターやオンライン対応のレファレンスセンターなどを（仮称）中央図書館に置くことが考えられる。また、他館で講座などを開催する際のシンクタンク機能も必要だろう。
- 後者については、当然中央図書館だけが担うのではなく、地域館・分館が地域に根差したコミュニティ形成のための空間としてあるべきであり、そうした役割分担が大切である。
- 今後は各地域で個性を活かした図書館づくりが進み、市域を超えたネットワークも生まれるだろうから、そうしたつながりも重要となる。

岩元教育長

- 本の貸し借りは北摂地域内で連携しており、それ以外でも今後様々な形を模索していく必要がある。ただ、図書館再編という課題もあり、まずはそれに取り組むことが第一と考えている。

嶋田氏（コーディネーター）

- 北摂地域では1960年代につくられた様々なインフラが更新時期を迎えることと財政状況の厳しさが重なり、非常に難しい局面を迎えている。
- 箕面市が新たな地域館の指定管理者を大阪大学としたほか、茨木市では市民ホールとの複合化に関する計画がある。

池澤氏

- 自治体間で連携することを考えると、開館日・時間なども連携してうまく設定する必要がある。また、これからはICTを使ったネットワークも大切で、オンラインで結ばれることで高齢者への自然な見守りなども可能となる。高齢化が進んだときにどのように地域を見守るのかも公共施設として大切な視点だと改めて思った。

小池氏

- 「しょうないREK」では、週1回リサイクル本を販売し（写真）、その収益で地域活動をしている。現在は高齢者による購入が多いが、色々な仕掛けがあればより多様な人たちに足を運んでもらえるのではないかと考え、実践している。

出典）しょうない REK HP
https://www.lib.toyonaka.osaka.jp/img/pdf/REKbora_boshuu2019.pdf

嶋田氏（コーディネーター）

- 瀬戸内市では、ガバメントクラウドファンディングで国宝の刀を買うための寄付を集めたことがある。アメリカの図書館でも、図書館費の約6%を寄付でまかなっているとの話があった。

池澤氏

- 収益施設の併設もありえるが、メインになりすぎると何のための施設かとなってしまう。機能を増やして建物を大きくするだけでなく、屋外空間を収益機能として活用する発想も必要となる。制約をかけすぎずにつくることが大切だと思う。

岩元教育長

- 図書館事業の中で収益事業を財源とすることは、法的にも非常に困難と考える。しかし、官民複合施設内で民間事業者とウィンウィンの関係を築き、人の呼び込み、民間事業者の収益につながれば、税収や地域の活性化にもつながる。その点は今後の図書館再編においても視野に入れ、様々な可能性を探る必要がある。

まとめ　これからの豊中市立図書館に期待すること

天瀬氏

- 豊中市では、市民が行政とともに図書館をつくってきた。これからも市民は意見を言うことができ、市は聞いてくれるという関係であってほしい。

池澤氏

- 図書館をつくるときの市の役割は、コーディネーターではなく、プロデューサーである。主役である市民が使いやすく演じやすい舞台をつくるためのプロデュースをしていただきたい。

小池氏

- 行政によるプロデュースに加え、行政と民間が対等な立場から力を合わせ、より良い豊中市立図書館をつくっていきたい。

岩元教育長

- 市立図書館再編や（仮称）中央図書館建設にあたり、各方面から多くのご意見をいただきたい。本市がプロデューサーとしての役割を担うことや、（仮称）中央図書館が市立図書館全館を統括するあり方の実現も必要と考えており、今後もご支援、お力添えいただきたい。

事前質問に対する回答

質問1： 公共図書館における電子書籍の動向や今後の見通し・可能性は？

回答：嶋田氏

公共図書館向けのコンテンツが少ないため、電子図書館の導入は約100自治体に留まっている。コンテンツを増やすには、出版社・著作者の逸失利益の補償に関する議論が必要であり、図書館も積極的にそれに加わる必要がある。

質問2： デジタル化社会において子どもや ICT 環境が整わない市民に必要な支援は？

回答：天瀬氏

オンラインミーティングでも機器の提供や講座の開催など環境面の支援に関する意見が出たが、置き去りになる人を出さないためには専門性を備えた人材を配置することも必要である。特に子どもは、人によって育つ面が大事なので、意識的に人による対応を残し、デジタル資料も紙資料も扱えるようにする教育や支援が必要と考える。

質問3： 市内小中学校における ICT 環境の整備状況は？

回答：教育長

小中学生全員に対するタブレット支給及び各校における高速通信環境整備が今年度中に完了予定である。タブレットは各家庭のインターネット環境に左右されないモデルとした。実体験も重要であるため、各校に対しては適切な活用を促していきたい。

質問4： 図書館を含む機能の複合化の可能性は？

回答：池澤氏

飲食・福祉・子育て支援・コミュニティ関連施設との複合化は考えられるが、敷地全体の活用や他施設との連携も含めて検討すべきである。複合化するだけでなく、図書館機能自体を新たにデザインしていくことも、魅力的な図書館づくりには重要と考える。

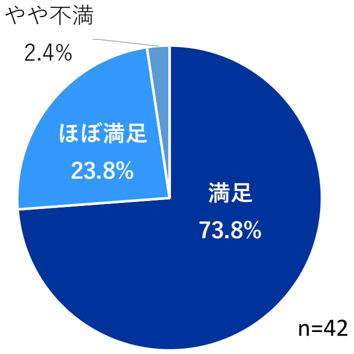
質問5： 図書館未利用者の利用を促す方法は？ 潜在的ニーズへの対応方法は？

回答：小池氏

外国人が地域の情報を得るために身近な場所として、多言語化などの整備を進めることが必要ではないか。また、図書館利用から遠ざかりがちな高齢者が、買い物ついでに立ち寄ろうと思えるようなものがあれば良いと思う。

視聴者感想・満足度 （※アンケートでいただいた多くのご回答から抜粋・編集しています）

満足度



感想

- それぞれが未来の図書館像を目指して話す内容に希望と夢が溢れていて、とても嬉しくなった。
- デジタル化・AIへの対応方法や、人とのつながりの大切さ、中央館と地域館・分館が担う役割など、これからの豊中市立図書館に求められるものがよく理解できた。
- 他都市の先進事例の話なども聞くことができ、財源が限られる中でのより良い図書館や公共施設のあり方について、大変参考になった。
- 様々な意見や経験を聞くことができ、有意義なシンポジウムだった。つくりこみすぎないという提案を活かし、住民参加型の生き生きと暮らせるまち、図書館づくりを目指したい。
- 多世代がつながる図書館ができること、本を読むだけでなく市民と共創するコミュニティの場ができることを楽しみにしている。